

一、はじめに

二〇一一年三月十一日に東北地方東岸を中心に日本中を揺らした東北大震災は、震災のみならず津波被害の大きさに日本はもちろん世界の人々をも驚かした。それは東京電力の原子力発電所を破壊、爆発させる巨大な破壊力を示したばかりでなく、沿岸部の市町村を怒涛のように襲い、人々の生活空間も破壊し、多くの人命を奪った。とくに破壊された原子力発電所からの放射能物質の拡散は地震による被害地域の中に致命的な空間をもたらし、地震被害をより重篤なレベルにした。それにより原子力発電所の安全神話が虚構であることを人々は知り、人々に地震の被害が多面化したことに不安をもたらし、地震への関心を一気に高めた。

ところで、原子力発電所の破壊については東京電力は地震規模が「想定外」の大きさだったためだという言い訳で、自らの「安全神話」の棚上げを図ろうとする保身姿勢が見え、世の中の一般的な社会認識とのズレを浮かび上がらせた。この点是对応にもたつく政府がどれだけのバランス感覚を持てるかを試す問題にもなっている。

今回の東北大震災は日中に発生したため、多くの映像がライブとして撮影され、それがわれわれに多大な衝撃を生々しい形で伝えられた点も画期的であった。とりわけ津波のそり立って襲ってくる映像は、今後も人々に継承されることは確実であり、地震多発国に住むわれわれにその自覚をあらためて確認させることになった意義は大きいといえる。しかし、昨年発生した熊本地震は、東北大震災に比べて局地的ではあったが、阪神淡路大震災と同様の直下型地震であり、その対応の遅れを地震側が突いて見せた格好となり、自覚だけではなく、新たな実践対応が必要

であることを知らしめてくれたといえる。

ところで、東京電力の原子力発電所の破壊が「想定外」の地震規模によるものとする言い訳に對して、地震研究者からは、貞観十一年（西暦八六九）に発生した陸奥を中心とした巨大地震の前例があり、決して「想定外」ではなかったとする主張も行われている。わが国は東アジア東端のプレートとの交差ゾーンにあり、プレートの移動が大小の地震を引き起こしてきた。移動による一定の時間差で各規模の地震が発生し、プレートはそのゆがみを修整しているという考え方は今日では一般化されている。

そこに時間差、つまり地震発生の時間間隔の究明が来るべき地震の予知につながるのではないかという研究課題が浮上することになった。直近の地震予知は困難との見解は昨年出されたが、時間間隔を追う研究と、その際発生した地震の規模や状況を歴史的地震の中から把握しようとする研究は東北震災以降増加しつつある。

それは地震のデータベースづくりから始まった。その全国的な研究の先駆けは、関東大震災のあと一九四一年の文部省震災予防評議会編『増訂大日本地震資料、全三巻』、戦後は武者金吉著『日本地震史料』（毎日新聞社刊）によってまとめられた。戦時中は東南海地震（一九四四年）や三河地震（一九四五年）が多大な被害をもたらしたが、戦時下のためその実態は伏せられ、戦争直後に発生した南海道地震（一九四六年）も混乱期の中にあつてその実態解明がすすんだのは近年のことであつた。

それゆえ、戦後、地震研究の再出発として心ある数少ない研究者、例えば羽鳥徳太郎¹⁾や飯田汲事²⁾がとりわけ東海地方をフィールドワークを重ねて歴史地震の全体像に迫るべくデータベース化を図ってきた。

一方、宇佐美龍夫は歴史地震資料調査を扱う財団法人日本電気協会の協力のもと、全国の歴史地震による被害のデータベースを作成し、『日本被害地震の概説・震度分布一覧―西暦四一六年―一八八四年―』を編集し³⁾、その後も歴史地震の研究会を立ち上げるなど、地道ながら精力的に調査研究を進めてきている。

いづれにせよ、巨大な東北大震災は、その「想定外」問答はともかく、歴史時代に発生した歴史地震研究を活性化させることになった。折からの東海地震発生説の予報的議論もあつて従来からの土木、建築系の研究者だけでなく少数ながら日本近世史の研究者、郷土史家研究者達も研究に加わるようになった。

そのような中であつて都司嘉宣とそのグループは歴史地震史料の再確認作業を現地からスタートさせ、先覚の羽鳥徳太郎や飯田汲事らの研究成果の再チェックも行い、各地の津波の波高や浸水域を地図上で確認する作業をすすめている。それらの成果は地震関係誌などに精力的にまとめられ報告されている⁴⁾。

地理学を専攻する筆者は、かねてより山地崩壊や洪水災害研究もすすめてきたが、東北大震災の影響を受け、それまでの断片的な史料収集を拡大し、東三河、さらには東海地方の歴史的大震災、津波被害について研究をまとめた⁵⁾ほか、名古屋大学に新設された減災センターでの歴史地震研究会で報告したり、地元での各団体での発表を行つてきた⁶⁾。

それらの研究では、多くの研究成果も閲覧したが、自分の発表も含め、それらの研究はデータ把握が優先で、震災に関する各事項の数量化は明らかにされるが、生身の人々の被災状況や震災認識、対応行動などの震災のリアル感が欠如していることが気になった。東北大震災の映像に映し出される圧倒的な津波のインパクトとその中で被災する人々のリアル感が既存の各論文からは

伝わってこないことへの不満感である。

そこには、統計データだけを扱ったという論文はその典型であるが、実証研究をめざしながら物理的データ以外は捨象してしまう方法論上の特性が震災研究に共通してみられ、例えば建物倒壊数、死者数、水没面積、などの形でしか表現されていないもどかしさを感じられた。

NHKが今なお連続放映している「その時わたしは」というタイトルでの地震発生時の被災者達の個別的ではあるが、震災時の行動、思考、判断ミスの有無などの体験、経験の語りは、多くの視聴者にリアルとしての共感を与え、今なお震災対応時の各個人の知恵を知らしめ、実感させているのだと思われる。そこには物量的で形式化し、リアル感のなくなった震災研究が捨象した部分そのものが描かれている。

学術研究としては対象の定型化は不可避な側面がある。しかし、震災研究という対象の特性は、人命と直接関わる側面を内包しており、これは出来れば多くの人々に共有してもらい、防災につながればよいという側面もある。したがって、学術研究をすすめる一方、震災のリアル感をどう伝えるかという点も十分に検討されるべきであろう。戦前、小学校の教科書に掲載された「いなむらの火」は、嘉永七年（一八五四）十一月の東海沖と南海での地震津波に襲われた和歌山県有田郡の広村の庄屋がとった行動を伝え、当時の日本人に共感と教訓を与えたエピソードである。震災時のリアル感が地震への対応の知恵も知らしめる価値を持ったのである。それをふまえた上での関心を広げ、その学術研究も可能になる筈である。

そこで、本書は、思い切って時空間を越えて歴史的な震災のリアルを知ってもらうために、地震を体験し、経験して筆を執り、記録に留めた人達を現在に招いて、その時代の言葉ではなく現

在の言葉で語ってもらおうという試みを行うことにした。用いる史料表現はそれによって第一級史料のレベルではなくなるが、現在の言葉にすることで広く読み手にリアル感を伝えることができる方を選んだ。

その際、東海地方の太平洋岸の中心にある渥美半島とその周辺地域からの情報発信を軸にして行うことを目指した。渥美半島は地震津波の最前線に位置し、伊勢湾や三河湾を外海の太平洋から防御する形の位置にある。ブックレットという本書は余りのスペースがないが、以上の主旨を中心にしつつ、遠州、駿河、伊豆、三河湾、伊勢湾、熊野方面にまでそのリアル感をつなげてみたいと思っている。